恥ずかしかったこと

菅田　忠志

「エッ！　ほんとにそんなことするんかあ？」

「そや。こんな話、誰からも聞いてえへんなあ」。同じ学校から就職試験を受験した友人が、企業診療所の診察室から出てくるなり、順番を待つ我々にこっそり耳打ちした。一日前に学科試験が済み、今日は健康診断のためにやってきていた。

身長・体重・視力・座高…、お決まりの項目を順を追って移動しながら測定してゆき、最後に問診がある。

「なにか変わったことはありますか？」

「いいえ特にありません」というような会話を先生と交わしながら、聴診器を当てられ　最後の砦を通過するものと思っていた。

ところがいきなりその儀式はやってきた。

「はい　では立ってパンツを少し下ろして…」。先

生と向かい合って座る看護婦さんの恥ずかしげもなく発する声にうながされ、しぶしぶ下げるや「はいではそのまま後ろ向きになって前かがみに曲げてください」。

一体なんの検査？と疑う余裕もなく、「はい、よろしい」と問診医が尻を軽く叩いておしまい。

あれは何の診断だったのだろう。今と比べれば戦後10年近くが過ぎていたとはいえ、まだまだ衛生面ではいろいろな問題を抱えていた時代であったことや、企業として終身雇用が建前だったことから、「健康優良児以外は採用しない」と、泌尿器科や肛門科の診断までやっていたのだろう。

看護婦さんたちが、事務的にテキパキとことを進めてくれたのが救いだったが、今風に言えば、『頭まっしろ』状態だったと思う。

学校に帰り、担任に報告したとき、ニヤリと笑った顔に、教師なりの思いやりを感じた。